筑波大学　先史学・考古学研究　第24号　51-74　2013

研究ノート

テル・エル・ケルク遺跡における土器新石器時代小児埋葬儀礼

廣　永　尚　子

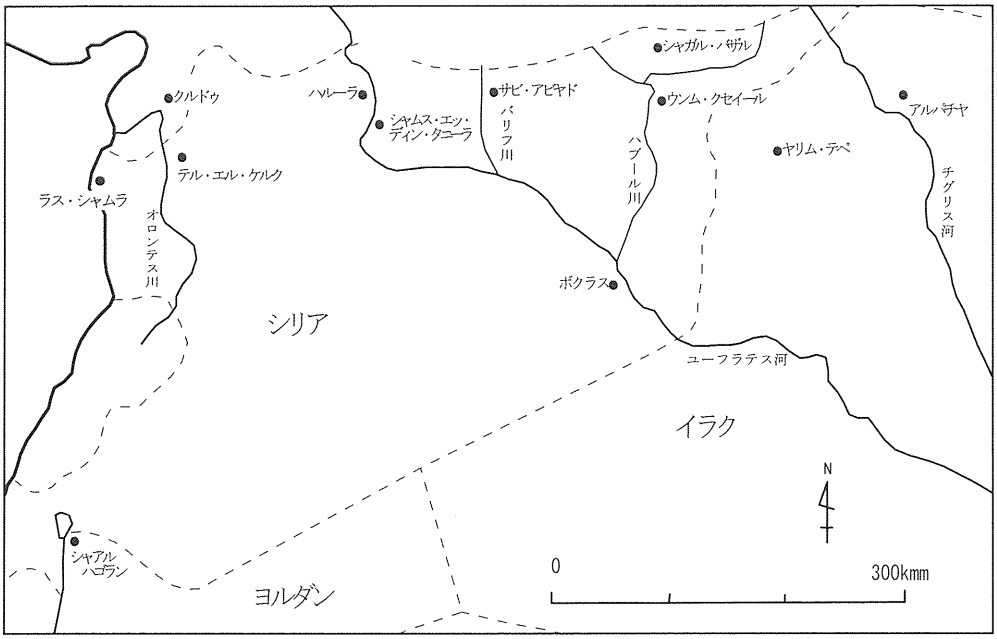
シリア北西部に位置するテル・エル・ケルク遺跡中央発掘区の土器新石器時代中葉の層からは，2009年までに子供の埋葬が約80例発見されている。それらの埋葬は集落内の居住域と墓地の二ヶ所に位置し，埋葬形態は一次葬，二次葬，火葬，撹乱・片付けに分けられた。居住域では住居址の内外の土坑に遺体を埋めており，子供同士の多体葬や土器被せ，儀礼ピット内の埋葬などがみられた。墓地からは大人と子供の多体葬，土器被せ，大人との二次葬や火葬などが検出されている。

民族誌的研究では，建物内や周辺への埋葬は死者の生まれ変わりを願い，壺は胎内を象徴する。居住域と墓地に葬られた子供は，どちらも再生への願いは共通していたと思われる。墓地へ埋葬された子供は居住域へ埋葬された子供よりも，集落を構成する共同体の一員という意識が強く持たれていたのではないだろうか。この時期のテル・エル・ケルク遺跡における子供の埋葬儀礼やその基となる観念は定まっておらず，埋葬場所に関しては大人と比べて強い規制はなかったと結論づけた。

Ⅰ．はじめに

埋葬とは単に遺体を処理する行為だけではなく，死者と生者がお互いに分離するための儀礼や，死者が死者の国に行くための期間と生者が喪に服する期間，そして死者が死者の国の成員となり，生者が日常の生活に戻るための一連の儀礼を内包している（ヘネップ 1977：189頁）。それは死者が属していた社会の成員の喪失を埋めるための期間（メトカーフ 1996：119頁）とも言われているため，大人の埋葬について言えることではないかと考える。なぜなら，子供は次世代の成員となる大切な存在であるが，まだ身体的・精神的に未成熟であり，労働など生活を営む際にはその社会の一成員であるとは言えない。そのような子供の埋葬儀礼が大人のそれと異なることは民族誌例からも明らかである（例えば大林：1997）。

西アジア土器新石器時代の子供の埋葬は集落内の住居址の内部や周辺から多く見つかっている。対して大人の埋葬はあまり集落内から発見されていない。大人と子供の間で埋葬場所に差がある背景には，当時の人々の埋葬観念を基にした埋葬儀礼が存在しており，そこには死亡年齢による区別があったのではないかと考える。大人と比べて発見例が多い子供の埋葬でも，住居址の発掘調査に付随して発見される埋葬例は限られているため，一遺跡に発見される数が少なく，これまでは埋葬儀礼の傾向を捉えるにすぎなかった。シリア北西部に位置するテル・アイン・エル・ケルク遺跡の中央発掘区の土器新石器時代中葉の層には，居住域と集落内に設けられた墓地の二つの場所から多くの子供の埋葬が見つかっている。同じ子供ながら同時期に埋



第 1 図　西アジア土器新石器時代の子供の埋葬が検出された主な遺跡

葬場所が二ヶ所に分けられていた理由を，埋葬形態を分析することにより埋葬儀礼から考察したい。

Ⅱ．土器新石器時代テル・エル・ケルク遺跡に隣接する地域の子供の埋葬の様相

1．地域と時代

テル・エル・ケルク遺跡は北レヴァント，シリア北西部のエル・ルージュ盆地の南部に位置する。北レヴァント地域の新石器時代の子供の埋葬は数えるほどしか発見されていない。そのため，テル・エル・ケルク遺跡があるシリア北西部から見て東に位置するユーフラテス河中流域とハブル河流域，南に位置する南レヴァント地域の埋葬例と比較しつつ北レヴァント地域の子供の埋葬がどのように行われていたのかについて概観する（第 1 図）。また，西アジアの新石器時代は先土器新石器時代 A 期（PPNA 期），先土器新石器時代 B 期（PPNB 期），土器新石器時代に大別される。小稿で取り扱うテル・エル・ケルク遺跡の埋葬は紀元前約 6600 ～ 6100 年の層から検出されており，土器新石器時代中葉に位置する（Tsuneki 2010：p.698）。しかし，前述したように埋葬例が限られているため，隣接地域の子供の埋葬例は紀元前約 6800 年～ 5200 年の土器新石器時代の埋葬例を用いることとする（Akkermans and Schwartz 2003：p.45, p.99，Croucher 2012：p.30）。

2．西アジア新石器時代の埋葬

はじめに西アジアの新石器時代の埋葬の特徴を述べたい。埋葬の多くは遺構内や遺構の周辺

に単発的・散在的に見つかっている。それは居住域を発掘調査した際に偶発的に発見されるためである。PPNA 期～ PPNB 期の埋葬例には大人も子供も含まれているが，土器新石器時代の居住域からは子供が多く発見されている。そこに大人が少ないことから，子供は集落内の住居の内外に埋葬され，大人は集落外に設けられた墓地に葬られたと考えられている。集落内の遺構からは床上や床下，壁下，炉の下などに埋葬がみられる。また，PPNA 期のイエリコの塔内埋葬や PPNB 期のジャデー・アル・ムガラやテル・アブ・フレイラ，チャヨヌに多くの人骨が納められた建物が発見されており，建物と埋葬は密接な関係を持っている（Kenyon 1981，Kuijt 1996，Coqueugniot 1999，Moore and Molleson 2000，Özbek 1988）。埋葬形態としては一次葬と二次葬[1)]が全時代を通してみられ，土器新石器時代に入ると火葬も現われる。一次葬は大人から子供までほとんどが屈葬であり，体位は左右の側臥や仰臥，伏臥と様々である。頭位方向に強い規制はみられない。副葬品は PPNA 期から PPNB 期は稀にしか共伴しないが，ハラフ期になると数や種類も増加する。二次葬は一般的に行われており，頭蓋骨埋葬や主に頭蓋骨や手足の長骨を集めて一ヶ所に埋葬されている例が多くみられる。頭蓋骨埋葬と呼ばれる腐敗が進んだ遺体や白骨化した体から頭蓋骨のみを外して建物の床下に埋納したり，床上に置かれたりしたものが西アジア各地域の遺跡から広く見つかっている。また，頭蓋骨にプラスターや天然アスファルト，貝などで装飾した装飾頭蓋骨と呼ばれるものは，特に PPNB 期の南レヴァント地域で発見されている（例えばイエリコ，アイン・ガザル，ナハル・ヘマルなど）（Garfinkel 1994，Rollefson 1986，Bar-Yosef and Schick 1989）。これらは，遺体を処理することが目的の埋葬であるというよりも，祖先崇拝に関わる儀礼や祭祀に用いられた宗教的遺物と位置づけられている（Kenyon 1953，Bienert 1991, 1995，Garfinkel 1994，禿 1995）。火と関連する埋葬は，PPNA 期のジャルフ・アル・アハマルでオーブンから底部が焼けた複数の頭蓋骨が見つかった例や，土器新石器時代のサビ・アビヤドから成人 2 体が祭祀的な道具とともに建物の屋根に置かれ，建物ごと焼かれたと解釈されている例がある（Jammous and Stordeur 1999，Verhoeven 2000）。しかしそれらは埋葬が主目的ではなく，明確な火葬は土器新石器時代のヤリム・テペⅡ号丘，テル・クルドゥにみられる（Merpert and Munchaev 1993b，Yener *et al.* 2000）。土器棺葬や土器被り葬も土器新石器時代に初現した。多くは子供の人骨に見られることから，子供に特徴的な埋葬方法と考えられている。新石器時代を通して墓碑と考えられる遺構や遺物はほとんど発見されていないが，例えば遺構外に設けられた土坑上面にプラスターが貼られたものが見つかっている（例えばクファル・ハホレシュ，ラマド）（Goring-Morris 2005，Bienert 1991）。また，人骨に赤色顔料や有機物が付着している例もあり，有機物はムシロのようなもので遺体を包んでいた痕と解釈されている（例えばジャデー・アル・ムガラ，テル・アブ・フレイラ，テル・ハルーラ）。副葬品の種類は土器，石製容器，石器，骨角器，ビーズなどが一般的である。ヤギやウシなどの角が共伴する例は多くはないが，西アジア各地の遺跡にみられる。

3．土器新石器時代テル・エル・ケルク遺跡の隣接地域の子供の埋葬

次に土器新石器時代の子供の埋葬を詳しくみていきたい。子供の埋葬のほとんどは建物内やその周辺から見つかっている。ヤリム・テペⅠのハラフ期の墓地は集落外に設けられた埋葬用の場所と考えられている。そこからは主に成人骨が発見されているが，1例のみ4歳の側臥屈葬の一次葬が見つかっている（Merpert and Munchaev 1993b：pp.218-221）。集落内の建物遺構から発見された人骨は床上や床下，壁下などから検出されている。その中では床下が最も多く，おそらく遺体が土坑に直接埋葬されている例（例えばサビ・アビヤド，シャガル・バザル，ヤリム・テペⅠ）もあるが，土器に入れられている例（例えばテル・ハルーラ，ヤリム・テペⅠ）も多い（Akkermans 2008，Mallowan 1936，Merpert and Munchaev 1993a，Molist and Faura 1999）。ヤリム・テペⅠ（ハッスーナ期）の集落からは住居の壁下，戸口や敷居の下，壁龕の中，炉の下からも子供の人骨が発見されており，数例に土器内埋葬や土器被せがみられる。これらは一次葬で側臥屈葬や仰臥屈葬，頭位方向は東や南が多い。サビ・アビヤドのOperation Ⅰ（紀元前約6100-5900年）では，1歳半前後の仰臥屈葬の人骨がオーブンの中から見つかった。その幼児の遺体は当時使われなくなったオーブンに葬られ，生者の近くに置かれていたと考えられている（Akkermans 2008：pp.623-624）。土器被せはヤリム・テペⅠのほかにテル・クルドゥ（アムークC層，紀元前約5500年）にもみられる。屈葬の乳児か幼児1体の脚に大きな楕円形の土器鉢片が被せられており，土器鉢片の近くからはミニチュアの彩文土器が出土している（Gerritsen and Sholts 2004：p.71）

多体葬はヤリム・テペⅡ（ハラフ期），サビ・アビヤドOperation Ⅲ（紀元前約6400年）で見つかっている。ヤリム・テペⅡでは2体の新生児が一緒に床下の土坑に埋められており，おそらく双生児だと考えられている。副葬品は伴っていない（Merpert and Munchaev 1993a：p.85）。また，同遺跡で成人2体と乳児1体が一緒に埋葬されている例が見つかっており，これは親子と考えられている（Merpert and Munchaev 1993b：p.210）。サビ・アビヤドOperation Ⅲの建物の部屋の床上から子供3体の重なった人骨が見つかっている。上から約12歳の左側臥屈葬，6～7歳のねじられた格好で脚が伸ばされた人骨，2～3歳のしゃがんだ格好の人骨である。人骨下の床や人骨に繊維物質などが見つかったため，これらの人骨はマットに包まれていたと推測されている。また，建物の造りから遺体の保管場所として使われていた可能性も指摘されている（Akkermans 2008：p.623）。同レベルからは成人1体と小児1体の多体葬も見つかっている。どちらも頭位が南東の側臥屈葬である。成人骨の前に小児骨が位置しており，一部の人骨の下には多くの土器片が見つかり，故意に敷かれたものと考えられている（Akkermans 2008：p.626）。

火葬はヤリム・テペⅡで10～13歳と10歳前後の2体の人骨が発見されている。前者は他の場所で火葬された後，彩文土器に入れられて土坑に埋葬されたと考えられている。人骨が入った土器内には20点の黒曜石製のビーズが副葬され，土坑の西側からは破砕された土器3点と石製容器2点，ペンダント型印章などが，東側からはミニチュア土器2点，破砕された石

製容器1点，多数のビーズなどが出土している。後者は円形住居の床下から彩文土器に入れられて埋葬されていた。近くに検出された楕円形の土坑で火葬された後，住居内に埋葬されたと考えられている。3点の土器，アラバスター製ゴブレットや鉢などが一緒に発見された(Merpert and Munchaev 1993b：p.216)。火葬人骨はテル・クルドゥでも発見されているが，それらの年齢は不明である。土器新石器時代には二次葬が発見されている遺跡はごくわずかである。また，子供の骨と同定されているものはないため，この時代の子供の二次葬に関しては良く分かっていない。

副葬品は子供に伴うことは一般的ではなく，ヤリム・テペⅡの火葬，テル・クルドゥの土器被せ，サビ・アビヤドにその例がみられる。サビ・アビヤドは全部で24体の子供の人骨が発見されており，その3分の1に副葬品が伴っていた。副葬品は1～3個の土器や石製容器が頭の近くに正位置で置かれたり，貝製・石製・骨製のビーズやペンダントを伴っていたりした。赤色や黒色の顔料と三角形の土器片が右腕の近くに見つかっている例もある。また，サビ・アビヤドでは胎児から14歳までの子供の人骨が発見されているが，子供のおよそ3分の2以上が1歳前に死亡したと算定されている。(Akkermans 2008：p.624)。

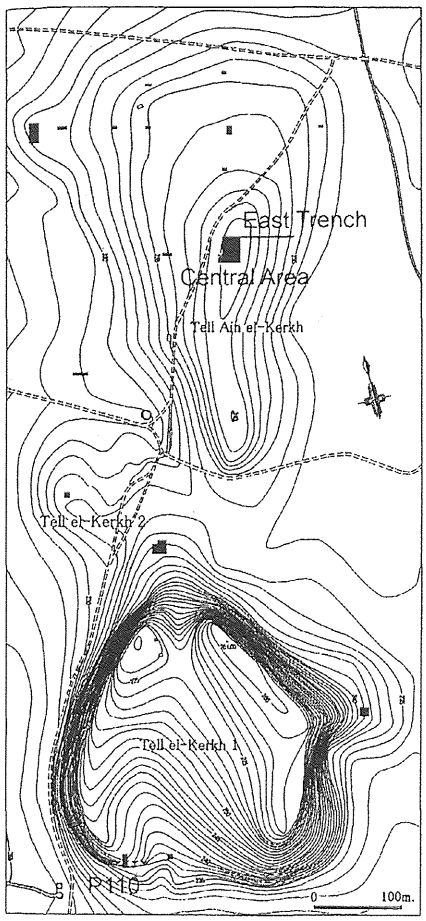
以上のように土器新石器時代の北西シリアの隣接地域の子供の埋葬は，全体に検出されている埋葬数が少なく，ほとんどの遺跡で発見される埋葬は単発的・散在的である。屈葬や土器を用いた埋葬，建物と関連が深い埋葬など西アジアの広範囲に同じ特徴を持つ埋葬がみられても，遺跡によって社会文化的背景や環境が異なり一概に解釈できないことや地域で論じるには遺跡数が少ないという現状がある。以上のことから，まずは個々の遺跡の埋葬例について考察を行うことが重要であると考える。

Ⅲ．テル・エル・ケルク遺跡における子供の埋葬

1．テル・エル・ケルク遺跡の概要と墓の検出状況

テル・エル・ケルク遺跡はシリア・アラブ共和国の北西部エル・ルージュ盆地南部に位置する（第2図）[2]。同遺跡は3つの遺丘からなり，その最も北側に位置するテル・アイン・エル・ケルク遺丘の中央区からは，エル・ルージュ2c期に属する文化層に埋葬址が多く見つかっている[3](常木・長谷川2010)。その埋葬場所は居住域と墓地の二ヶ所にみられる（第3図）[4]。墓地は居住域と接しているものの，居住用の遺構が伴わないことから，集落内に設けられた埋葬専用の場所と考えている（村上2008)。墓地内の埋葬に関しては，筆者が実際に発掘調査に携わった2007～2009年とそれ以前に検出された埋葬に関して扱うものとする。

テル・エル・ケルク遺跡で検出された埋葬は，その埋葬形態から一次葬，二次葬，火葬，攪乱・片付けに分類した。一次葬は基本的に人骨が原位置を保っている形態を指し，一個体のみが埋葬されているものを単体葬，複数体が一緒に埋葬されているものを多体葬と呼ぶ。二次葬は2回以上埋葬されたものを指し，検出状況は頭蓋骨，長骨など主要な骨がある程度一ヶ所にまとまって埋葬されているものをここに分類した。一個体や複数体の場合がある。火葬は人骨



第2図　テル・エル・ケルク遺跡の調査区

に被熱痕があり，検出状況から明らかに故意に火葬されたと考えられるものを分類した。稀に二次葬の中に被熱痕のある人骨が見られるが，これらは故意に火葬したものか火事などで焼かれたものかの判別がつかないことからこれらは火葬からは除外した。攪乱は遺構や埋葬が重なっている場合，上層のそれらの建築や掘り込みにより，関節がはずれて人骨が動かされると考える。そのため，人骨の一部が原位置を保っているものの，比較して保たれていない人骨がほとんどの場合ここに分類した。片付けは二次葬を行う時に一次葬の人骨を取り出した際に取り残されたものを指す。テル・エル・ケルク遺跡では二次葬が存在していることから片付けの跡も見つかることが自然であり，特に少量の骨の破片や頭蓋骨と長骨を伴わない小さな骨（手足の指骨や白骨化した顎骨から抜け落ちた歯など）のみの出土の場合，片付けと考えている。攪乱と片付けは全く異なる働きの結果によるもので本来は明確に分けるべきだが，発掘時の検出状況によってはその違いを見出せないものも多く，残存状態が悪いものは人骨の一部が見つからないことも考えられる。そのため，攪乱と片付けは一緒の分類とした。また，これらのほかに少量の人骨の破片が発掘区において見つかっている。動物骨や石，土器片などの堆積内にわずかに含まれていたこれらの人骨の破片は，攪乱や片付けにより混在したものと考え，埋葬例として取り上げなかった。

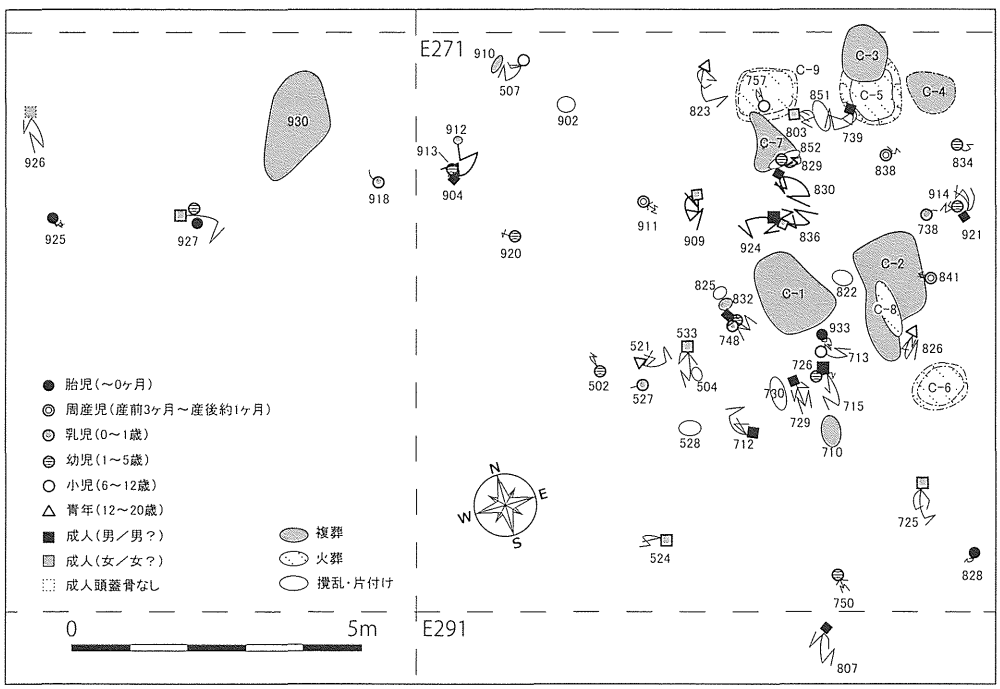
子供の年齢については，胎児から12歳までとし，それらの年齢に同定された人骨を対象とする[5)]。12歳くらいになると生理学的には永久歯に生え変わり終え，第二次性徴が表れ始める。また発達課題的には体力・知力ともに発達し大人と同様の能力を期待され始め，その準備に入る段階とされる（高橋ほか1993）。そのため，およそ12歳で子供と青年を分ける。発掘調査により，2005年までに出土した人骨を同定したハドソン氏と，2007年度から現在までに出土した人骨を同定したドウアティ氏は，子供を胎児・周産児・乳児・小児の4段階に分類している。ドウアティ氏はその年齢を，胎児は生まれるまで，周産児は産前3ヶ月から産後約1ヶ月，乳児は0ヶ月から1歳，小児は1歳から12歳としている。しかし，小児は年齢幅があり，多くの子供の人骨がある程度限定した年齢を同定されていることから，小稿では小児を幼児と小児に分け，前者を1歳から約5歳，後者を約6歳から12歳に分けた。5，6歳は乳歯が脱落し

第 3 図　テル・エル・ケルク遺跡中央発掘区（エル・ルージュ 2c 期の新しい方）

始め永久歯に生え変わる時期であり，運動能力も発達し，労働力を期待されるようになる（山田 1997：3 頁）。民族誌の中には子供はこの時期を境に生活において完全な変化があり，幼児の集団から引き離されるという例もあるため，この年齢で分けることは妥当である（ヘネップ 2012：85 頁）。また，上記の年齢区分では分けられない年齢幅を持っている場合は乳幼児（0 ヶ月～ 5 歳），幼少児（1 歳～ 12 歳）としている。ハドソン氏が年齢を同定した人骨についてもこの分類を適用している。

はじめに，2009 年までにエル・ルージュ 2c 期層で発見されている埋葬について成人と青年を含めた概要を述べたい。エル・ルージュ 2c 期の居住域の主な埋葬址は，1997 年～ 2002 年に検出され，これらの埋葬は，三宅氏がまとめている（三宅 2003）。2007 年～ 2009 年に見つかった 3 体を加え，全部で 27 例 29 体を数える。このうち成人は 2 体，青年 3 体，小児以下は 22 例 24 体である[6]。成人のうち男性 1 体のほかは性別不明である。残存状態が悪いものも多いが，一次葬と攪乱・片付けのみで明確な二次葬や火葬は発見されていない。

墓地は 2007 年に発見され，第一次調査で検出された埋葬を含めると 2009 年までに見つかった人骨の数は 150 体前後を数える（常木・長谷川 2010：p.35）。二次葬に関しての人骨の数は同定の際に最少個体数で数えられている。埋葬方法は一次葬，二次葬，火葬，攪乱・片付けに分けられる（第 4 図）。一次葬は 60 体以上を数える。年齢は胎児から老人まで幅広い年齢層で構成されており，男女も同程度みられる。多くが単体での埋葬であるが，多体葬も 2 例見つかっている。また頭蓋骨を伴わない女性人骨も発見されている（Str.926）。体位はすべて屈葬で左



第 4 図　テル・エル・ケルク遺跡中央区の墓地全体図（エル・ルージュ 2c 期）

右の側臥，仰臥，伏臥と様々である。頭位方向に強い規制はみられない。副葬品はおよそ半数にみられ，男女の差はほとんどないが，青年以下は成人に比べて共伴率が低い。種類は石製や骨製，土製のビーズが最も多く，石器や骨製品，スタンプ印章，土器が一般的である。石製容器とウシの中手骨あるいは中足骨は稀であり，出土した際にはどちらも成人に伴っていた。

二次葬と考えられる埋葬は全部で10例である。そのうち2例は明らかに土坑内に複数の人骨が積み重ねられていた。二次葬例はほとんどの人骨に被熱痕は見られないが，一部焼かれた骨が含まれた例もみられる。1体のみの例もあるが，およそ3～10体前後が一緒に埋葬されていた。Str.710，Str.930，C-4，C-7は成人のみで構成されており，それ以外には子供が含まれていた。副葬品は5例に伴っており，ビーズ，スタンプ印章，土器，ウシの中手骨あるいは中足骨が出土している。

火葬は4例で，そのうち3例が土坑内に複数の人骨が積み重ねられており，土坑の壁や床，覆土が激しく焼かれていた。土坑の大きさに対する人数や各骨の出土位置から遺体を死後すぐに焼いたのではなく，ある程度白骨化してから骨をまとめて焼かれたと考えられる。そのため二次葬の一種と考えている。あとの1例は人骨検出面直下に被熱痕がみられず，おそらく別の場所で焼かれた後に集められたものと思われる。およそ5体～8体が一緒に埋葬されていた。副葬品は　3例にみられ，土坑への埋葬の場合，被熱痕のある覆土の検出面に土器や石列，炭化したコムギ，石製の球を伴っている場合がある。また土坑内や人骨近くに土器が置かれる例や人骨近くにビーズ，石器，骨角器などを伴う例もある。

攪乱・片付けは8例である。そのうち2例は2体の骨が含まれていたため，元は一次葬の多体であった可能性もある。2例にビーズが共伴しており，これらは一次葬の副葬品だったのが副葬のために人骨が取り出された際に残されたものと考える。

2．子供の居住域埋葬

居住域で検出された子供の埋葬は全部で22例24体である。一次葬が15例17体，攪乱・片付けと考えられるものが7例7体で，明確な二次葬は見られなかった（第1表）。年齢は胎児，周産児，乳児，乳幼児，幼児に分けられる。

一次葬を年齢別にみると乳児が7体と最も多く，次いで周産児5体，乳幼児2体，幼児2体，胎児1体である（第2表）。埋葬姿勢は残存状態が悪く不明なものもあるが，全て屈葬であり，右側臥，左側臥，仰臥である。年齢別にみると偏りは少しあるものの全体数が少ないため大きな差は出なかった。しかし伏臥は全年齢を通してみられない。頭位方向は三宅氏の記述に従っている（第5図b）。方位が分かっているものは12体でそのうち3体ははっきりしないためおよその方向を示している。東西南北すべての方向にみられ，特に南向きが多い。顔の向きは埋葬体位に即して自然な方向を向いているものがほとんどであるが，Str.48だけは仰臥であるにもかかわらず顔は西を向いている。

2体が同場所から発見されている埋葬は2例（Str.141, 76）ある。同時に2体を埋葬した多

第1表　子供の居住域埋葬

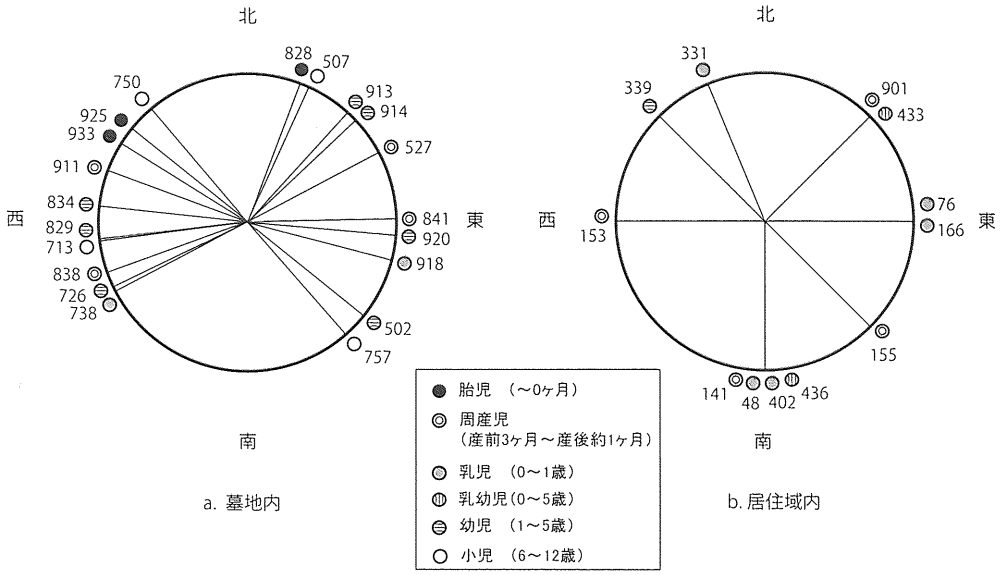
No.	Str. No.	年齢区分	場所	埋葬方法（姿勢）	頭位方向	顔の向き	副葬品
1	426	胎児	遺構外	一次葬（不明）	—	—	—
2	153	周産児	儀礼ピット	一次（左側臥屈葬）	西？	—	フリント製尖頭器1点
3	141	周産児	床下	一次（右側臥屈葬）	南	東	—
		周産児	床下	不明	—	—	
4	901	周産児	床下	一次（左側臥屈葬）	北東	下	—
5	155	周産児	床下	一次（仰臥屈葬）	南東	—	—
6	513	周産児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—
7	519	周産児	遺構外	撹乱・片付け	西？	—	—
8	142	周産児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—
9	331	乳児	遺構外	一次（仰臥屈葬） 土器被せ	北北西	—	暗色磨研土器1点 石製ビーズ多数
10	166	乳児	床下	一次（仰臥屈葬）	東？	—	—
11	145	乳児	壁下	一次（不明）	—	—	ツノガイ製ビーズ1点
12	48	乳児	遺構外	一次（仰臥屈葬）	南	西	—
13	76	乳児	遺構外	一次（左側臥屈葬）	東	—	—
		乳児	遺構外	不明	—	—	
14	402	乳児	遺構外	一次（右側臥屈葬？）	南？	—	—
15	319	乳児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—
16	320	乳児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—
17	522	乳児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—
18	433	乳幼児	遺構外	一次（仰臥屈葬）	北東	—	—
19	436	乳幼児	遺構外	一次（左側臥屈葬）	南	—	—
20	45	幼児	床下	一次（不明）	—	—	—
21	339	幼児	遺構外	一次（右側臥屈葬）	北西	—	—
22	302	幼児	遺構外	撹乱・片付け	—	—	—

—は不明または無いことを表わす。

第2表　居住域の年齢別埋葬

年齢	埋葬方法		計	埋葬場所				計	一次葬埋葬姿勢					計
	一次葬	撹乱		住居内		住居外	儀礼ピット		左側臥	右側臥	仰臥	伏臥	不明	
				床下	壁下									
胎児	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1
周産児	5	3	8	4	0	3	1	8	2	1	1	0	1	5
乳児	7(1)	3	10	1	1	8	0	10	1	1	3	0	2	7
乳幼児	2	0	2	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0	2
幼児	2	1	3	1	0	2	0	3	0	1	0	0	1	2
合計	17	7	24	6	1	16	1	24	4	3	5	0	5	17

（ ）内は土器被せ埋葬の数



第5図　子供の一次葬の頭位方向

体葬にもみえるが，発掘時に1個体分しか認識されず，その人骨の体位が両例とも明確で残存状態が良かったことを考えると同時期の埋葬よりも後から遺体を追加した追葬の可能性も考えられる。すなわち残存状態が良い人骨の遺体が後から埋葬され，その際に元からあった白骨化された人骨が動かされたのではないだろうか。Str.141は2体とも0ヶ月の人骨と同定されており，周産児に分類した。建物遺構の一室の床下から発見されており，床下埋葬の可能性が高い。Str.76は2体とも乳児である。胎児や周産児の場合，同時期に死亡した要因の一つに出産時死亡が挙げられ，それからみるとStr.141は双生児の出産時死亡で同時期に同場所に埋葬された可能性も指摘できる。しかし，Str.76については乳児期に双生児が同時に死亡するケースは限られ，例えばごく身近に接するために感染症などから死に至るなど死因がかなり限定されるだろう。

一次葬の中で土器被せが1例発見されている（Str.331）。「人骨上に暗色磨研土器の破片が覆うように出土した。後に接合してみたところ大型の土器の丸い底部であることが判明した。検出された時は割れていたが，もともとは大きな破片を覆いとして被せたものであった可能性が高い。その破片を取り上げるとその下から小型の鉢（一部欠損）が載せられた状態で人骨が検出された。（三宅2003：p.59 一部抜粋）」この土器を被せられた人骨の肩と腰の付近からは複数のビーズが出土している。

儀礼ピットと呼ばれる石組み遺構（Str.153）の上部の西側から生後0か月の周産児の骨が見つかっている。儀礼に関連した人骨と考えられているが，一次葬という形態からは遺体を処理する目的も少なからずあったと考え一次葬に分類した。儀礼ピットはStr.74の床下から発見された。ピットはStr.74が建てられる前に造られたため，建物内に設けられたものではないが，

この建物は炉や貯蔵施設がない単室であり，西アジアにおいて儀礼としばしば関連して発見されるシカの角やウシの肩甲骨が見つかっていることから儀礼ピットに関連した建物だと考えられている。また，周産児は不慮の死あるいは生贄として葬られた可能性も指摘されている（Tsuneki 2002：p.141）。この周産児の胸部にはフリント製の尖頭器が置かれており，これは遺体に突き刺さっていたわけではなく副葬されたものと考えられている。同レベルからは動物骨もまとまって出土している（Tsuneki 2002，三宅 2003）。

また，残存状態が非常に悪くその埋葬体位が明確でなく，人骨の一部しか見つからなかった埋葬を攪乱・片付けと分類した。居住域のため，攪乱されたものが多いと考えるが，二次葬のために動かされた可能性もある。その場合，居住域では二次葬は見つかっていないため，墓地へ二次葬されたと考えられる。

埋葬場所は遺構内に 7 体，住居外に 16 体，儀礼ピット内に 1 体が発見されている。遺構内の場合は床下が 6 体，壁下が 1 体である。人骨の検出上面にプラスター面や硬い面が検出されたため，床下と判断されている（三宅 2003）。遺構内から発見された人骨はすべて一次葬で攪乱は受けていなかった。年齢別にみると周産児が最も多く 4 体，乳児と幼児は 1 体ずつで胎児はみられなかった。遺構内の人骨の頭位方向はおよそ南から北東に限られている。遺構外には 16 体が発見され，そのうち 9 体が一次葬，7 体が攪乱・片付けである[7]。最も多いのは乳児で 8 体である。次いで周産児 3 体，幼児 2 体，胎児 1 体で，乳幼児を幼児に含めたとしても乳児が他の年齢の倍を占める。頭位方向が判明しているのは 8 体のみであるが，南，東，北東，北西と様々である。これらのことから埋葬場所に関しては，遺構内よりも遺構外に埋葬されることが多く，特に乳児以上は遺構外に埋められている。周産児はどちらにもみられるが，遺構外から見つかっている人骨はすべて攪乱を受けている。

副葬品の共伴率は低く 22 例中 3 例にとどまっている。壁下埋葬である乳児の一次葬（Str.145）の頭骨の下から発見されたツノガイ製ビーズ 1 点，儀礼ピット（Str.153）から見つかった人骨の胸部付近に置かれていたフリント製の尖頭器 1 点，土器被せの人骨（Str.331）の肩の付近と腰の付近からまとまって検出された多数のビーズや肋骨，脊椎骨の下から出土したビーズ，人骨に載せられていた小型の暗色磨研土器の鉢 1 点である。このように，副葬品は壁下埋葬，儀礼ピット内埋葬，土器被せ埋葬といった特殊な埋葬方法がとられている人骨に伴っている。

3．子供の墓地内埋葬

墓地内から発見されている子どもの埋葬人骨は全部で 56 体を数える。埋葬方法は一次葬，二次葬，火葬，攪乱・片付けに分類できる。

一次葬は 22 例 24 体であり，そのうち 2 例は多体葬，土器被せが 1 例みられる（第 3 表）。一次葬を年齢別にみると幼児が最も多く 9 体でほかの年齢の胎児，周産児，乳児，小児と比べると倍以上発見されている（第 4 表）。埋葬姿勢はすべて屈葬で，右側臥が 9 体，左側臥が 7 体，仰臥が 3 体，伏臥が 1 体，不明 4 体である。左右の側臥が多く，比較して仰臥と伏臥はあまり

第3表　子供の墓地の一次葬

No.	Str.no.	年齢区分	埋葬方法（姿勢）	頭位方向	顔の向き	副葬品
1	828	胎児	右側臥屈葬	北東	北西	—
2	925	胎児	左側臥屈葬	北西	—	—
3	933	胎児	右側臥屈葬 土器被せ	北西	南西	—
4	527	周産児※	右側臥屈葬？	北東	—	—
5	838	周産児	左側臥屈葬	西	北？	—
6	841	周産児	仰臥屈葬	東	—	—
7	911	周産児	仰臥屈葬	北西	南西？	—
8	738	乳児	右側臥屈葬	南西	南	—
9	918	乳児	右側臥屈葬？	南南東	東下	—
10	726	乳幼児	右側臥屈葬	南西	南	—
11	502	幼児※	左側臥屈葬	南東	上	—
12	829	幼児	左側臥屈葬	西	北東	—
13	834	幼児	左側臥屈葬	西	北	—
14	913	幼児	伏臥屈葬	北東	北	石製ビーズ20点
15	914	幼児	右側臥屈葬	北東	西	石製ビーズ8点
16	920	幼児	左側臥屈葬	東	南東	—
17	507	小児	右側臥屈葬	北東	—	暗色磨研土器1点
18	713	小児	左側臥屈葬	西	北	—
19	750	小児	仰臥屈葬	北西	—	—
20	757	小児	右側臥屈葬	南東	北東	骨製突錐1点
21	748	幼児	不明 多体	—	—	石製ビーズ1点 石器（ドリル）1点
		乳児		—	—	
22	927	胎児	不明 多体	—	—	暗色磨研土器1点 ビーズ6点
		幼児		—	—	

※マーク・ハドソン氏により2007年に修正
—は不明または無いことを表わす。

第4表　墓地の年齢別埋葬

年齢	埋葬方法				計	一次葬埋葬姿勢					計
	一次葬	二次葬	火葬	撹乱・片付け		左側臥	右側臥	仰臥	伏臥	不明	
胎児	4（1）	0	0	1	5	1	2	0	0	1	4
周産児	4	0	1	1	6	1	1	2	0	0	4
乳児	3	4	0	0	7	0	2	0	0	1	3
乳幼児	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0
幼児	9	0	1	4	14	4	2	0	1	2	9
幼少児	0	1	6	0	7	0	0	0	0	0	0
小児	4	8	1	2	15	1	2	1	0	0	4
合計	24	14	10	8	56	7	9	3	1	4	24

（　）内は土器被せ埋葬の数

用いられていない。不明の4体は全て多体葬のもので，成人骨と一緒に埋葬されていた。頭位は東と西の方向が多く，北と南の方向は少ない（第5図a)。特に真北と真南は敬遠されていたと思われる。頭位方向に年齢による差はみられなかった。

多体葬は両例とも成人1体と子供2体の組み合わせで，3体は同時に埋葬されたと考えている（Str.748，Str.927)。Str.748の成人は20～35歳の男性で極度の屈葬で伏臥の体位，両手は胸の辺りで組まされていたようである（写真1)。この成人骨の左腕の辺りから2体の子供の骨が発見された。1体は0～1歳の乳児でもう1体は1～2歳の幼児である。2体とも残存状態は悪く埋葬体位などは不明である。これらの人骨は上部に約1.2m×0.8mのプラスターが貼られた墓から発見された。プラスターは部分的に粗い石灰岩の石列で囲まれており，これらのプラスターや石列は墓標のような役割を果たしていたと思われる。成人の右腕の近くからビーズ，腰の近くからはドリルが見つかっている。Str.927の多体葬は20～35歳の成人女性と胎児，4～5歳の幼児の組み合わせである。発掘時に動物の攪乱を受けたとみられ特に胸から上は原位置を保っていない部位もあるが，成人は右側臥屈葬とみられる。胎児と幼児の骨も攪乱を受けており体位は不明である。頭部西側に完形の暗色磨研土器1点，胸部の南側に口縁から5cm程度の半円で割られた暗色磨研土器1点が見つかり，後者には貝殻1点と石器1点が伴っていた。また，ビーズが全部で6点見つかっている。そのうちの5点は胎児の骨付近に位置するため，胎児に与えられた可能性が高い。あとの1点は成人の腰骨近くに見つかっている。攪乱を受けているため同時期に3体が一緒に埋葬されたことははっきりとはいえないが，墓地内の二次葬とは異なり，一部が原位置を保っていること，体のほとんどの部位がみられることから一次葬とした。また，追葬の可能性もある。その場合は両例とも成人人骨の下から子供の骨が検出されたため，子供の埋葬が先で成人が後から埋葬されたと思われる。

土器被せ葬はStr.933の1例が発見された（写真2)。いくつかの暗色磨研土器の破片の下から胎児骨が出土した。人骨の下には土器片はみられず，上から被せられた土器被せとみられる。

写真1　墓地内検出の多体葬（Str.748）

写真2　墓地検出の土器被せ葬（Str.933）

土器片は全てが同一個体のものではなく2～3個体が使われていた。土器片の一部は全身をすっぽりと覆い隠すくらいの大きさであったことから遺体を葬った時点では，割れていなかったと思われる。胎児は右側臥屈葬で，右手と左手は顔の前に置かれていた。頭位方向は北西で副葬品はなく，土器片が被せられている以外は，他の胎児の埋葬との違いは見られなかった。

子供を含む二次葬と火葬は9例が見つかっている（第5表）。そのうち6例は土坑や石列，火葬骨が一ヶ所に集められていたことにより，埋葬場所が他の場所から隔離されていることから，それらはC-番号（Concentration No.）で表わしている。9例の内，二次葬は6例である。

第5表　子供の墓地の二次葬・火葬

No.	c	Str.	年齢区分	主な出土部位	副葬品	人数
1	—	832	1. 乳児 2. 小児 3. 幼小児	頭蓋骨・脊椎骨・肋骨・指骨の一部	暗色磨研土器1点 ビーズ7点 （石製6点、貝製1点）	少なくとも5体 （成人含む）
2	—	910	乳児	頭蓋骨・長骨・手足の骨の一部	—	少なくとも3体 （成人含む）
3	—	912	乳児	頭蓋骨のみ	—	—
4	C1	717	乳幼児	頭蓋骨	—	少なくとも14体 （成人・青年含む）
		718	乳児	頭蓋骨，脚の骨など	—	
		740	小児	頭蓋骨	—	
		741	小児	頭蓋骨出土	—	
		742	小児	頭蓋骨出土	—	
5	C2	746	幼児	頭蓋骨など（被熱痕あり）	—	少なくとも10体 （成人・青年含む）
			小児		—	
		751	小児	頭蓋骨，骨盤	石製スタンプ印章1点 石製ビーズ2点	
		756	幼小児	頭蓋骨のみ	—	
6	C3	831	小児	頭蓋骨	—	少なくとも8体 （成人含む）
		847			—	
		848			—	
		850			—	
		854	小児	頭蓋骨	石製ビーズ1点	—
7	C6	865	1. 幼児 2. 幼小児 3. 幼小児 4. 幼小児	頭蓋骨（火葬）	暗色磨研土器1点	少なくとも7体 （成人含む）
		866				
		867				
		868				
8	C8	869	1. 幼小児 2. 幼小児 3. 周産児	火葬（土器被せあり）	ドリル2点	少なくとも8体 （成人・青年含む）
		870				
		871				
		872				
		873				
		874				
		875				
9	C9	919	幼小児	頭蓋骨など（火葬）	—	少なくとも5体 （成人・青年含む）

—は不明または無いことを表わす。

C-3 は楕円形の土坑内に，成人を含む少なくとも 9 体の頭蓋骨や長骨を含み，そのうち 2 体が小児である。C-1 と C-2 は石列で区切られた場所から複数の人骨が発見されている。一次葬が攪乱を受けたと思われる例もあるが，それぞれ少なくとも 10 体と 14 体の人骨が頭蓋骨を中心に集められていた。C-1 は乳児 1 体，乳幼児 1 体，小児 3 体が，C-2 は幼児 1 体，幼小児 1 体，小児 2 体が含まれていた。Str.832 は成人を含む少なくとも 5 体の人骨が一ヶ所から発見された。乳児 1 体，幼小児 1 体，小児 1 体の部分的な骨が含まれており，暗色磨研土器 1 点と石製と貝製のビーズ 7 点が人骨の間から見つかっている。Str.910 は成人と幼児 1 体を含む少なくとも 3 体が一ヶ所から見つかっている。発掘区の壁に一部が当たっていたため，全体は不明だが，見つかった人骨が原位置を保っていないこと，複数の人骨が混ざっていたこと，発見された人骨に頭蓋骨や長骨が含まれていたことから二次葬に分類した。Str.912 は乳児の頭蓋骨のみが Str.904（30 ～ 35 歳のおそらく男性成人の一次葬）のすぐ足下から出土した。攪乱を受けたようにも見えるが，頭蓋骨以外の骨が見当たらず，頭蓋骨はその形を比較的きれいに保っていたことから，故意にそこに置かれたように思われる。足と頭蓋骨の位置から成人が埋葬されるときに乳児の頭蓋骨が足下に置かれたと考えると，乳児は成人の埋葬前に死亡したと考えられる。

火葬は，3 例に子供が含まれている。C-6 は土坑内火葬で少なくとも成人を含む 7 体が含まれていた。子供は幼児 1 体と幼小児 3 体である。土坑底部から被熱された暗色磨研土器の壺 1 点が見つかっている。C-8 は人骨検出面直下に被熱がみられず，おそらく別の場所で焼かれた後に集められたものと思われる。成人と青年を含む少なくとも 8 体が見つかっている。子供は 3 体で周産児 1 体，幼小児 2 体である。土器被せが南部分に 1 ヶ所見られたが，その人骨の年齢は明らかではない。土器被せが子供に特徴的な埋葬方法だとしたらこの場合も子供特に周産児の可能性が高いと推測できる。C-9 は土坑内火葬で，成人と青年を含む少なくとも 5 体が見つかっている。子供は幼小児が 1 体である。火葬の場合は，人骨が焼けて破片になっていることがほとんどであり，その埋葬形態を知ることは難しい。テル・エル・ケルク遺跡で見つかっている火葬例のうち子供を含まない例もあり，必ずしも子供に一般的な埋葬方法であるとはいえない。また，子供の骨は破片になりやすいことを考えると胎児や周産児には稀な埋葬方法であるともいえず，逆に周産児の骨が見つかっていることから，年齢に制限がなかったことを表わしているともいえる。

攪乱・片付けと考えられるものは 8 例である（第 6 表）。Str.851 と Str.852 はどちらも同場所から成人と子供の二人分の頭蓋骨の一部などが出土しており，元は一次葬の多体であった可能性が高い。Str.851 は成人の年齢性別が不明で，子供は 10 ～ 12 ヶ月の乳児である。Str.852 は年齢不明だがおそらく男性の成人と 1 ～ 2 歳の幼児の組み合わせである。また，Str.822 は多数のビーズが少量の破片とともに出土しており，二次葬する際に取り出されなかったものと想定できる。

副葬品は一次葬で 6 例，攪乱・片付けは 2 例に共伴していた。二次葬と火葬は 5 例にみられ

第6表　子供の墓地の撹乱・片付け

No.	Str.no.	年齢区分	主な出土部位	副葬品	人数
1	504	周産児	頭蓋骨，下顎骨など	—	—
2	851	乳児	頭蓋骨・骨盤などが一部	貝製ビーズ1点	少なくとも2体（成人含む）
3	528	幼児	歯，四肢骨など出土	—	—
4	730	幼児	骨盤，背骨など出土	—	—
5	852	幼児	下顎骨などが一部出土	—	少なくとも2体（成人含む）
6	902	幼児	頭蓋骨の一部	—	—
7	822	小児	指骨・歯・脊椎骨の一部	ビーズ20点（石製19点，貝製1点）	—
8	825	小児	長骨・寛骨・指骨の一部	—	—

—は不明または無いことを表わす。

るが，その多くは出土位置から個人ではなく全体に副葬されたとみている。一次葬の副葬品は伏臥例，多体葬例という特殊な埋葬にも伴っているが土器被せには共伴していなかった。撹乱・片付けの成人骨とともに出土した乳児骨1体のほかは全て幼児以上に伴っていた。

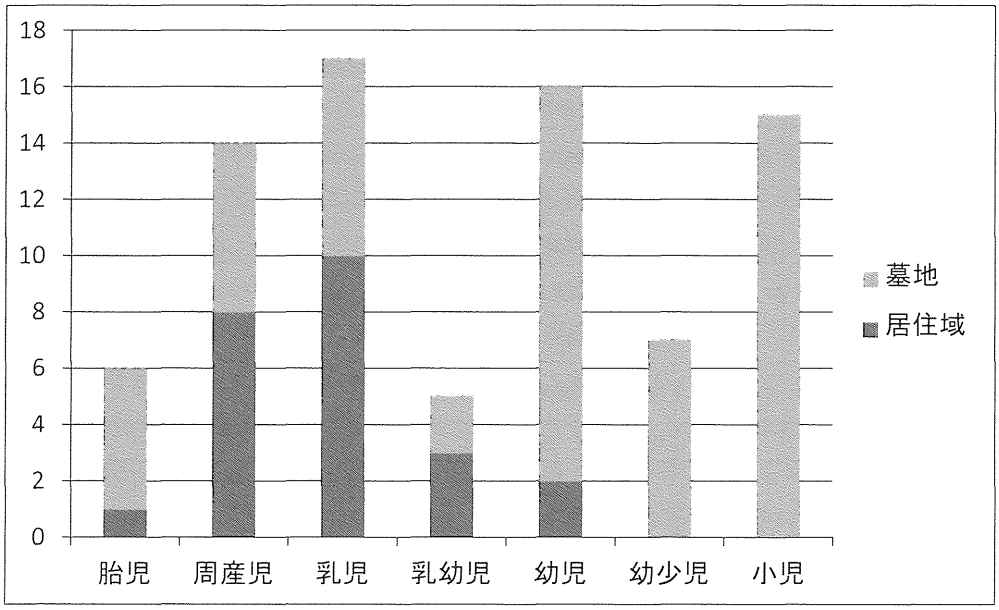
Ⅳ．子供の埋葬儀礼の考察

土器新石器時代中葉のテル・エル・ケルク遺跡中央区における居住域と墓地の両方に胎児から小児までの年齢の子供が埋葬されていた。そこにはどのような違いがあるのかⅢ章で明らかになった子供の埋葬の特徴についてまとめ，その埋葬儀礼を民族誌的研究から考察する。

テル・エル・ケルク遺跡中央区で見つかった子供の埋葬人骨は合わせておよそ80体である。これらを年齢別にみると，乳幼児と幼小児を入れて胎児～1歳くらいがおよそ37～40体，幼児がおよそ16～20体，小児がおよそ15～20体である（第6図）。子供のうち約半数が1歳までに死亡していることが分かる。乳児の死亡率は現代の発展途上国では一般的に高く，その原因は伝染病，早産，分娩時異常が挙げられる。また，1歳以降は離乳食への移行時に起こる感染症や栄養失調から来る免疫力の低下から死亡率が高くなるという研究もある（Pearson et al. 2010）

一次葬の姿勢は全て屈葬である。左右の側臥が最も多く，仰臥もみられるが，伏臥は居住域に見つかっておらず，墓地に一例（Str.913）がみられるのみである。その伏臥の人骨は非常に不自然な姿勢をとっており，首も捻じ曲げられている。また，子供2体と一緒に埋められていた成人男性（Str.748）も伏臥である。おそらく子供を腕に抱えてうつ伏せになって埋められ，上からプラスターで覆われたのだろう。2例とも副葬品が伴っている。これらの例から伏臥は一般的には用いられず，特殊な遺体に限って用いられた可能性がある。

屈葬は世界に広く分布している埋葬姿勢であり，ピアソン（P. Peason）は「休息や胎児の姿勢は再び生まれ変わることや先祖の地へ到着する前触れ（筆者訳）（Peason 1999: p.54）。」と



第 6 図　子供の年齢別死亡数

述べている。一方で実用的な解釈もあり，できるだけ墓穴を掘る労力を使わないために屈葬にするという。後者は確かに民族誌例にもあり，否定することはできない。しかし，子供特に乳児以下の屈葬に実用的な必要性は感じられない。大林は屈葬について二つの解釈を挙げている。「死者が戻ってくるのを恐れて，死者をきつくしばる習俗と関係がある（大林 1997:84 頁)。」ことと，「屈葬は母胎のなかにおける胎児の姿勢をかたどったもので，死者は母なる大地に胎児の形で送り返され，そこからまた再生するという考え（大林 1997：84 頁)。」である。死者への恐れは死者崇拝や副葬品，墓地での供犠という形にも現れる。また穀物栽培民の社会において大地へ返され再生するという観念が強く出てくるという（大林 1997：40，88 頁)。そのため土器新石器時代のテル・エル・ケルク遺跡における屈葬はこの二つの解釈ができる。ただし，建物に伴う埋葬は生者が死者との関係を維持しようとし，その家に生まれ変わることを願う意味が込められているため，テル・エル・ケルク遺跡の建物内や周辺に埋められた死者のみならず，集落内に位置する墓地に葬られた死者に対しては，恐れよりも再生観念が強いのではないかと思う。

頭位方向は墓地で真南と真北が避けられている傾向がある。居住域には同様の傾向はみられない。民族誌的研究では死者の国や故郷の方向を向いている例があり，いずれも霊魂が赴く方向である（大林 1997：100 頁)。頭位方向に強い規制がみられないことは，集団として持っているそれらの観念が弱いということかもしれない。それからいえば居住域よりも墓地への埋葬に集団としての規制があったのではないだろうか。

多体葬の例は少ないが，居住域と墓地の両方にみられた。居住域は多体と考えるとしても子供同士のみである。双生児の可能性がある周産児のため，出産時死亡と考えられる。墓地は成

人と子供の組み合わせのみでいずれも2体の子供と成人1体である。墓地に成人同士の多体は見つかっていない。成人骨の一例は若年の女性であるが，もう一例は若年の男性であることと，子供が二人いることから多体葬によく見られる妊婦の出産時死亡ではなく，同時期に死亡したか成人が後に死亡した家族や親族の可能性もある。

土器被せは居住域に1例，墓地に1例発見された。居住域は乳児で墓地は胎児であり，年齢はどちらも幼い。西アジアの各遺跡から多く発見されているものの，テル・エル・ケルク遺跡においてはその数から特殊な埋葬といえる。壺は象徴的に子宮を表しているといわれ，土器内埋葬や土器被せは再生を象徴している（Eliade 1971: p.119）。

一次葬は居住域と墓地の両方から見つかっているが，二次葬は墓地にのみ発見された。テル・エル・ケルク遺跡で見つかった火葬や，西アジアの他の遺跡でみられる火葬後にさらに土坑や土器に入れる例も二次葬として捉えられる。二次葬は民族誌例に多くみられ，二次葬が意味するところについてメトカーフ（P. Metcalf）は「二次死体処理とは何人かの個人の，あるいは故人全員の遺骨を，正式な社会的採可を受けて，一次的な保管所から永久的な休息の地へと移動させることである。（メトカーフ p.137）」と述べている。また，大林はベトナムの民族誌例から「人が死ねば埋葬するが，最初の埋葬は仮ものである。つまり死体はまだ完全に死んだものではないからだ。（中略）人が死んで人間社会を立ち去るのも，（中略）数年を要する（大林 1997：125 頁）。」と述べ，「長期間かかって死が確定するのは，長いあいだかかって死者が死者の国の本式の住民になるということ（大林 1997：126 頁）。」だと述べている。火葬は未開社会において一般的ではないが，死者の霊魂の観念と火葬が何らかの意味において密接に関連していることを示唆する民族誌例が北アメリカの先住民にある。火葬は霊魂に死体からできるだけ早く立ち去る可能性を与えたり，霊魂の古いすみかである肉体をできるだけ早く破壊することで，生まれ変わりへの刺激になったりするという（大林 1997：56 頁）。テル・エル・ケルク遺跡の二次葬や火葬の多くに子供が含まれているが，これらの埋葬儀礼については青年と成人を含めて論じることが必要である。子供の二次葬について言えるとすれば，子供は大人と同じように二次葬されていたということであり，それは上記に想定される大人と同様の埋葬観念に基づいて行われたと考えることができよう。

副葬品については一次葬と攪乱・片付けは子供に伴うものと判断できるが，二次葬は個人に共伴するものかどうかはほとんど明らかではない。墓地では一次葬は22例中6例，攪乱・片付けは8例中2例に共伴し，合わせて子供の埋葬例のおよそ27％に伴っていた。居住域は一次葬22例中3例に伴い，攪乱・片付けには見つからなかった。居住域は子供の埋葬例のおよそ14％に伴っていた。墓地・居住域とも胎児と周産児には伴っていなかった。共伴例は墓地にやや多いが，墓地では多体葬2例と不自然な姿勢の伏臥屈葬例，居住域では儀礼ピットと土器被せ，壁下埋葬とほとんどが特殊な例である。ビーズの場合，日常身に着けるネックレスなどの装飾品と捉えることもできるが，特に幼児以下が普段から身に着けていたとは考えがたい。子供自身の所有物である可能性はあるが，子供が亡くなった時に親などが副葬品として身

に着けさせたと考えるのが妥当であろう。土器は装飾品と異なり，明らかに埋葬に共伴するものとして理解できる。

V．おわりに

土器新石器時代のテル・エル・ケルク遺跡の子供の埋葬は，集落内の住居の床下や住居のすぐそばに埋葬される場合と集落内に設けられた墓地に埋葬される場合に分けられていた。土器新石器時代の西アジアの埋葬習慣として，住居内や家のすぐそばへの埋葬は子供が多くを占めているといってよい。住居内への埋葬は生者が死者との共存を望んでおり，子供はその家に生まれ変わることを願われた表れではないだろうか。また，屈葬姿勢や土器被せ埋葬から生まれ変わることが象徴的に表されているように思う。一方で，墓地へ埋葬された子供にも屈葬と土器被せがみられ，その再生に関する観念は共通していたと考える。ただし，墓地は集落に住む人々が共同で利用するという公共的な意味合いを持つため，居住域に埋葬された子供よりも，集落を構成する共同体の一員であるという意識が持たれていたのではないだろうか。そこから墓地に検出した多体埋葬例を見ると，親とその子供達である可能性もあるが，例えば伯父と甥などの親族である可能性も考えられる。反対に特に居住域に多く埋葬された乳児以下は，集落を構成する共同体よりも家族に帰属すると考えられたり，遺族の意向に沿って生者の近くに置かれたりしたと考えられる。そこからは，子供の埋葬儀礼やその基となっていた埋葬観念は遊動的で強い規制はなかったと言える。ただし，二次葬された子供は同じ二次葬を受けた成人と観念の上で同じ立場にあったことが考察できる。

テル・エル・ケルク遺跡の子供の埋葬を論じるためには，同遺跡から見つかっている青年や成人の埋葬例の詳細な分析が必要である。子供と大人の埋葬を比較検討することにより，より子供の埋葬儀礼を理解することができるだろう。

謝辞

最後に本稿を執筆するにあたり，常木晃先生をはじめ，先生方，先輩方のご指導とご教示をお受けした。末筆ながら心より感謝申し上げます。また，本文中で用いているテル・エル・ケルク遺跡の資料は，シリア政府と筑波大学の合同発掘調査隊の許可を得て使用したものである。未発表の資料の使用を快く許可していただいた調査団長の常木晃先生と調査メンバーの方々に改めて感謝申し上げます。

註

1）二次葬は必ずしも二回目の埋葬を言うのではなく，埋葬が二回以上行われたことを指す。

2）テル・エル・ケルク遺跡はシリア政府と筑波大学の共同調査隊により 1997 年から 2010 年まで継続して発掘調査が行われた。第 1 期は 1997 ～ 2002 年の全 6 次調査，第 2 期は 2005 年～ 2010 年の全 6 次調査にわたる。

3）紀元前およそ 6100 ～ 6600 年の層である。テル・アイン・エル・ケルク遺跡の中央区からの埋葬址は

1997年～2002年，2007～2010年に発見されている。以下，テル・アイン・エル・ケルク遺跡をテル・エル・ケルク遺跡と呼ぶ。

4）墓地はこの図の前後の時期に検出された遺構と共伴する可能性もある。この図には墓地以外の墓は載っていないが，遺構内もしくはその周辺に位置する。

5）人骨の同定や年齢・性別の同定については，居住域に出土した子供の人骨のうち，Str.901はショーン・ドウアティ氏，それ以外はマーク・ハドソン氏によるものである。墓地に出土した子供の人骨は，Str.502，504，507，527，528はハドソン氏，それ以外はすべてドウアティ氏によるものである。

6）Str.431はわずかな骨しか検出されていないため，埋葬人骨に含めていない。

7）建物遺構の基礎と思われる石列のすぐ近くから見つかっている例や，遺構から少し離れた場所から検出された例もある。また，Str.48，319，320，331，339は石列内に発見されており完全に遺構外と判断できないが，床面が検出できていないことから遺構外に分類した。

引用・参考文献

Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria*, Cambridge University Press.

Akkermans, P. M. M. G. 2008 Burying the dead in Late Neolithic Syria. In: J.M. Córdoba, M. Molist, M.C. Pérez, I. Rubio, S. Martínez (eds.), *Proceedings of the Fifth International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*. Madrid: UAM Editiones (2008), pp.621- 645.

Bar - Yosef, O. and T. Schick 1989 Early Neolithic organic remains from Nahal Hemar cave, *National Geographic Reserch* 5(2), pp.176-190.

Bienert, H. D. 1991 Skull Cult in the Prehistoric Near East, *Journal of prehistoric religion* 5, pp.9-23.

Bienert, H. D. 1995 The Human Image in the Aceramic Neolithic Period of the Middle East, In Ritual, *Rites and Religion in Prehistory* III*rd Deya International Conference of Prehistory Vol.I*, W.H.Waldren, J. A. Ensenyat and R. C. Kennard (eds.), BAR International Serie 611, pp.75-103.

Coqueugniot, E. 1999 Tell Dja'de el-Mughara, in G.del Olmo Late and J.-L. Montero Fenollós, eds., *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates*: The Tishrin Dam Area, Barcelona : Editorial AUSA, pp.41-55.

Croucher, K. 2012 *Death and Dying in the Neolithic Near East*, Oxford University Press.

Garfinkel, Y. 1994 Ritual Burial of Cultic Objects: The Earliest Evidence, *Cambridge Archaeological Journal* 4-2, pp.159-188.

Gerritsen, F. and S. Sholts 2004 Tell Kurdu Excavations 2001, *Anatolica* 30, pp.37-75.

Goring-Morris, A. N. 2005 Life, death and the emergence of differential status in the Near Eastern Neolithic : evidence from Kafar HaHoresh, Lower Galilee, Israel, in J. Clark (ed.) *Archaeological Prespectives on the Transmission and Transformation of Culture in the Eastern Mediterranea*, pp.89-105.

Jammous, B. and Stordeur, D. 1999 Jerf el-Ahmar, un site mureybetien du moyen Euphrate syrian, horizon PPNA – Xe millènaire avant JC, in G.del Olmo Late and J.-L. Montero Fenollós, eds., *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates*: The Tishrin Dam Area, Barcelona : Editorial AUSA, pp.57-69.

Kenyon, K. M. 1953 Neolithic Portrait- Skulla from Jericho, *Antiquity* 106, pp.105-107.

Kenyon, K. M. 1981 *Excavations at Jericho. Vol. III: The architecture and stratigraphy of the Tell*, British School of Archaeology in Jerusalem : London

Kuijt, I. 1996 Negotiating Equality though Ritual: A Consideration of Late Natufian and Prepottery Neolithic A Period Mortuary Practices, *Journal of Anthropological Archaeology* 15, pp.313-336.

Mallowan, M. E. L. 1936 The excavations at Tall Chagar Bazar and an archaeological survey of the Habur region,

1934-35, *Iraq 3*, pp.1-59.

Merpert, N. Y. and R. M. Munchaev 1987 The earliest levels at Yarim Tepe I and Yarim Tepe II in northern Ieaq. *Iraq 49*, pp.1-36.

Merpert, N. Y. and R. M. Munchaev 1993a Yarim Tepe I, In: N. Yoffee and J. J. Clark (eds.) *Early Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq*, University of Arizona Press, pp. 73-114.

Merpert, N. Y. and R. M. Munchaev 1993b Burial practices of the Halaf Culture, In: N. Yoffee and J. J. Clark (eds.) *Early Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq,* University of Arizona Press, pp. 207-224.

Molist, M. and Faura, J.M. 1999 Tell Halula : un village des premiers agriculteurs-èleveurs dans la vallèe de l'Euphrate, in G.del Olmo Late and J.-L. Montero Fenollós, eds., *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates*: The Tishrin Dam Area, Barcelona : Editorial AUSA, pp.27-40.

Moore, A. M. T. and T. I. Molleson 2000 Disposal of the Dead, in A.M.T.Moore, G.C.Hillman and A.J.Legge, *Village on the Euphrates: From Foraging to Farming at Abu Hureyra*, Oxford: Oxford University Press, pp.277-299.

Özbek, M. 1988 Culte des crânes humains à Çayönü, *Anatolica* 15, pp.127-138.

Parker Peason M. 1999 *The Archaeology of Death and Burial*. Phoenix Mill: Sutton Publishing.

Pearson, J. A., Hedges, R. E. M., Molleson, T. I., and M. Ozbek 2010 Exploring the Relationship Between Weaning and Infant Mortality: An Isotope Case Study from Asikli Hoyuk and Cayonu Tepesi, *American Journal of Physical Anthropology143*, pp. 448-457.

Rollefson, G. O. 1986 Neolithic `Ain Ghazal(Jordan) – Ritual and Ceremony II, *Palèorient 12*, pp.45-51.

Tsuneki, A. 2002 A Neolithic Foundation Deposit at Tell 'Ain el-Kerkh, In: H.G.K. Gebel, Bo Dahl Hermansen and Charlott Hoffmann Jensen. (Hrsg.) *Magic Practices and Ritual in the Near Eastern Neolithic*. Berlin: ex oriente. pp.133-143.

Tsuneki, A. 2010 A Newly Discovered Neolithic Cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria. In: P. Matthiae, F. Pinnock, L. Nigro and N. Marchetti (eds.), *Proceedings of the 6th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, May, 5th–10th 2009*. "Sapienza" – Universita di Roma. Volume 2, pp. 697-713.

Tsuneki, A. 2011 A Glimpse of Human Life from the Neolithic Cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria, *Documenta Praehistorica* XXXVIII, pp.83-95.

Tsuneki *et al.* (eds.) 2011 *Life and Death in the Kerkh Neolithic Cemetery*. Department of Archaeology. University of Tsukuba, Tsukuba

Verhoeven, M. 2000 Death, Fire and Abandonment – Ritual Practice at Late Neolithic Tell Sabi Abyad, Syria, *Archaeological Dialogues 7*, pp.46-65.

Yener, K. A., Edens, C., Harrison, T. P., Verstraete, J. and T. J. Wilkinson 2000 The Amuq Valley Regional Project, 1995-1998, *American Journal of Archaeology 104*, pp. 163-220.

エリアーデ, M. 1971 『生と再生―イニシエーションの宗教的意義―』堀一郎訳 東京大学出版会《Eliade, M. Birth and Rebirth, Harper & Brothers, New York》

大林太良 1997 『葬制の起源』中央公論社.

禿 仁志 1995 「祭りと埋葬―パレスチナにおける事例を中心に―」常木晃・松本健編『文明の原点を探る―新石器時代の西アジア―』同成社 118-145 頁.

髙橋道子・藤崎眞知代・仲真紀子・野田幸江 1993 『子供の発達心理学』新曜社.

常木　晃・長谷川敦章　2010「新石器時代の巨大集落遺跡―テル・エル・ケルク2009年度調査―Excavations at Tell el-Kerkh 2009, Syria」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』古代オリエント博物館・西アジア考古学会　31-36頁.

三宅　裕　2003『平成12年度－平成14年度科学研究費補助金基盤研究（C)(2)　研究成果報告書　墓制からみた西アジア先史時代社会構造の研究』3-93頁.

メトカーフ，P.・R.ハンティントン　1996『死の儀礼：葬送習俗の人類学的研究』第2版　池上良正・池上冨美子訳 未来社《Metcalf, P., R, Huntington *Celebrations of Death The Anthropology of Mortuary Ritual*, Cambridge: Cambridge University Press》

ヘネップ，A. V.　2012『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳　岩波書店《Gennep,. A.V. *Les Rites de Passage, Etude systematique des ceremonies*, Librairie Critique, Paris》

村上尚子　2008「テル・アイン・エル・ケルクの新石器時代の墓地の位置づけ」『史境　第56号』歴史人類学会　103-118頁.

山田康弘　1997「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第4号　1-40頁.

Child burial rituals at Tell el-Kerkh during the Pottery Neolithic

HIRONAGA, Naoko

Up until 2009, about 80 child burials from the Middle Pottery Neolithic were discovered at Tell el-Kerkh. They were buried either within or around houses and the cemetery. There are primary burials, secondary burials and cremation burials at Tell el-Kerkh. We also discovered burials using several pottery shards, probable, burials of twins and burials including two children and one adult, and so on.

In Ethnological studies, burials connected with houses symbolize rebirth. The pottery vessels may also symbolize a mother's womb. This evidence at Tell el-Kerkh during the Middle Pottery Neolithic suggests, family or the community hoped or wished for the dead children's rebirth. The children were probably buried by members of the Kerkh community. In conclusion, the various types of burial ceremonies for children at Tell el-Kerkh indicate that perceptions of the death of children were diverse and the regulation for the placement of child burials was not as rigid as that of adults.